The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	欲望・善・利己主義 : J.S.ミルによる「功利性原理」証明の一つの帰結
Author(s)	大石, 敏広
Citation	メタフュシカ. 2004, 35(2), p. 121-128
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/9284
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

欲望・善・利己主義
― Ｊ．Ｓ．ミルによる「功利性原理」証明の一つの帰結 ―

大石敏広

以下で私は、しばしば嫌悪の目で見られる「利己主義(egoism)」の真実を明らかにするための一つの考察を提示したい。

「利己主義」には二つの種類がある。「倫理的利己主義」と「心理的利己主義」である。「倫理的利己主義」は、「人間が実際に利己的であろうとなかろうと、利己的であるべきだ」と主張する。これに対して、「心理的利己主義」は、「人間の行為は、事実として、常に、自己利益によって動機付けられているのであり、人間は本質的に利己的な存在である」といった立場である。本論で考察の対象となるのは「心理的利己主義」[1]である。

「心理的利己主義」について考えるに当たり、Ｊ．Ｓ．ミルの『功利主義論』は有益である。その第４章では、「功利性原理の証明」と一般に呼ばれる議論が展開され、「功利性原理」の妥当性が主張されている。その証明において、「心理的利己主義」が重要な役割を果たしており、「心理的利己主義」の真理性が示されていると考えられる。本論では、その証明の一部に焦点を当て、「心理的利己主義」が真理であることの一端を示そうと思う。

１　ミルの証明

ミルの『功利主義論』第４章における「功利性原理の証明」の要点を順次述べると、次のようになる。

（１）あるものが望ましいことを示す唯一の証拠は、人々がそれを実際に望んでいるということである。（第３段落）

（２）各人は、自分自身の幸福を望んでいる。（第３段落）

（従って）

（３）各人の幸福は、その人にとって善いもの(a good)である。（第３段落）

---

[1] これは、個人の事実に関する記述である。また、本論で述べるように、この「利己主義」は、〈傍若無人に振る舞う自己中心的な人の性格〉を指すのではなく、より広い概念を表す。

（従って）

（４）全体の幸福は、すべての人の総体にとって善いものである。（第３段落）

（従って）

（５）幸福は、人間的行為の究極目的の一つとして、従って道徳の基準の一つとして資格がある。（第３段落）

（ところで）

（６）人間は本性的に、幸福の一部でも幸福の手段でもないようなものは望まない。（第４段落～第１０段落）

（従って）

（７）幸福と幸福の手段が、唯一望ましいものである。（第９段落）

（従って）

（８）幸福は、人間的行為の唯一の究極目的であり、幸福の増進はあらゆる人間行動を判断する基準である。よって、幸福は道徳の基準でなければならない。（第９段落）

以上が証明全体の大筋であるが、本論では、（１）の命題をめぐる問題を議論の中心におく。この部分では、「望ましい」と「望まれる」の関係が述べられている[2]。

命題（１）に関してミルは第３段落で次のように論じている（引用文(a)としておく）。

「ある対象が見える(visible)ということを証明するには、人々が実際にそれを見る(see)以外にない。ある音が聞こえる(audible)ということを証明するには、人々がそれを聞く(hear)以外にない。そして、我々の経験の他の源泉についても、同様である。同じように、何かが望ましい(desirable)ということを示す証拠は、人々が実際にそれを望んでいる(desire)ということ以外にない、と私は思う。」(4.3)[3]

このミルの説明に対していくつかの反論が考えられる。次にこれを見ておこう。

２　ミルに対する批判

この命題（１）に関するミルの説明を読んでまず言えるのは、ここで使われている‘visible’、‘audible’と‘desirable’の類推は成り立たないのではないかということである。確かに‘visible’は、「見ることができる(can be seen)」を意味しており、それゆえ「ある対象が見える(visible)」ということを証明するには、実際にそれを見てみればよいということになる。しかし、‘desirable’の場合はそうは言えない。なぜなら、‘desirable’は、「望むことができる(can be desired)」ではなく、「望ましい(worth desiring)」を意味しているからである。人がある対象を実際に望んでいるからといって、必ずしもその対象が望ましいとは言えないのである。このよう

[2] なお、命題（１）～（３）から分かるように、ミルは、「望ましい」と「善い（よい）」を、相互に入れ替え可能な言葉と考えている。

[3] 『功利主義論』からの引用、並びにそれへの参照については、ページ番号ではなく、章、段落番号をこの順で本文中に記入する。

に、一見したところでは、ミルの説明は間違った類推に基づいているという印象を与えていることは確かである。

この批判についてはG．E．ムーアも指摘しているが、彼はさらに積極的な批判を提示している。ムーアによれば、ミルは、「自然主義的誤謬(the naturalistic fallacy)」を犯しているという。ムーアの批判は、功利主義に対して致命的な打撃を与えたと言われており、現在もなおその影響力は失われていないと考えられる[4]。では、「自然主義的誤謬」とはどんな誤謬か。

まず、ムーアが「自然主義的誤謬」によって何を意味していたかは、「この誤謬〔自然主義的誤謬〕は、善とはまさに、自然的性質を表す言葉で定義されうるある単純な、あるいは複合的な観念を意味すると主張する点にある、と私は説明した。ミルの場合、善とはこのように単に、欲求されるものを意味すると考えられており、そして欲求されるものはこのように自然的な言葉で定義されうる何かあるものである」[5]という彼の記述からはっきり読み取れる。「自然主義的誤謬」とは定義上の誤謬だということである。ムーアは、ミルの証明を、非自然的性質を示す「望ましい」という言葉を、自然的性質を示す「望まれる」という言葉で定義する企てだと見なし、批判していると言える。

だが、「自然主義的誤謬」の別の解釈によれば[6]、ミルが犯しているのは、「非価値（事実）判断」から「価値判断」を導き出す誤りである。ミルは、「ある対象が望まれている」という事実認定的な前提から、「その対象は望ましい」という価値評価的な結論を引き出している、というわけである。

さらに別の解釈も可能である[7]。ミルは「自然的性質」と「非自然的性質」を同一視する誤りを犯している、という解釈である。つまり、ミルは、「望まれる」という言葉によって意味される「自然的性質」と、「望ましい」という言葉によって意味される「非自然的性質」とを区別できていない、ということになる。

「自然主義的誤謬」でムーアが、後の二つの解釈で示されているような誤謬を考えていたかどうかははっきりしないが、問題は、ミルの証明がそうした三つの誤謬を犯しているかどうかである。もしこれらの批判がミルの議論に当てはまるなら、その議論は妥当ではないと言える。事実はどうか。この点について答える前に、ミル批判に対するミル擁護者の反論を取り上げ、その反論が問題の解決になっていないことを示そう。

３　ミル弁護論

ミルは、「仮に功利説が提案している究極目的が、理論と実践の上で、究極目的として認められていないとするなら、それが究極目的であると誰にも確信させることなどできないであろう」

---

4 Cf. Susan Leigh Anderson, *On Mill* (Wadsworth, 2000), p. 54. また、平尾透『功利性原理』(法律文化社、1992 年)、165-166、172 頁参照。

5 G. E. Moore, *Principia Ethica* (Cambridge, 1903), revised ed., p. 125. Cf. *ibid.*, pp. 111, 118-119. なお、〔　〕内は引用者の補足であり（以下同様）、下線部分は原文ではイタリック体となっている。

6 Cf. Roger Crisp, *Mill on Utilitarianism* (Routledge, 1997), p. 74, 平尾、前掲書、171 頁。

7 Cf. Crisp, *loc. cit.*

(4.3, cf. 1.4)と述べている。ミルは、あらかじめ、全体の幸福が道徳の究極目的であるという確信をもっていたと言える。さらにミルは、「究極目的の問題は、普通の意味では証明することはできない。推論による証明ができないということは、すべての第一原理に共通のことであり、行動の第一前提にとってそうであるのと同様に、知識の第一前提にとってもそうである」(4.1)と述べているが、他方で、「知性的な人々にこの学説〔功利説〕を承認するかどうかを決定させるにたる考察を提出することができるであろう。そして、これは証明と同じことである」(1.5, cf. 4.12)と主張している。つまり、ミルにおいて、「功利性原理」は第一原理として前提されており、それは普通の意味では証明できない。ミルは、知性的な人々を説得して、「功利性原理」を受け入れさせるための議論をしようとしたのであり、これを「証明」と称していたということになる。

ミル弁護論の主流は、この「功利性原理の証明」の意味に注目し、それをもとに上記引用文(a)についての解釈を与えている[8]。もちろん、主流的見解として一つの統一的解釈があるわけではないが、次に、本論の論旨に必要な限りで、主流的見解の本質的論点をまとめておこう。

ミルは厳密な証明を意図していたわけではないのだから、引用文(a)の証明も厳密な証明ではない。事実、そこでミルは、「見える」、「聞こえる」については「証明(proof)」という言葉を使っているが、「望ましい」については「証拠(evidence)」という言葉を使っているし、「見える」、「聞こえる」について言えることが、「望ましい」について「同じように(In like manner)」言えると述べているのであって、「同一の仕方で(In the same way)」とは言っていない。それゆえ、「見られる」が「見える」を必然的に含意しているように、「望まれる」が「望ましい」を必然的に含意している、とは主張されていないのである。ここでの類推は、「事実に関する知識の問題」と「実践の究極目的に関する問題」の間の類推である(cf. 4.1)。「事実に関する知識」の場合に我々は、事実を判定する、視覚、聴覚といった「感覚的経験的能力」に依存している。同様に、「実践の究極目的」の場合に我々は、「欲求という経験的能力」に依存しているのである。つまり、我々は、「見る」という経験があるからこそ「見える」について語ることができるのと同じように、「望む」という経験があるからこそ「望ましい」について語ることができるわけである。

もしこうした解釈が正しいとするなら、前章で述べたミルに対する批判はミルに対する誤解であり、その批判はミルの議論には当てはまらないということになろう。ところが、こうした解釈には重大な欠陥がある。

4　ミル弁護論の批判

まず、ミルは、引用文(a)で、「何かが望ましい(desirable)ということを示す証拠は、人々が実際にそれを望んでいる(desire)ということ以外にない」とはっきり述べているという問題がある。

8　Cf. J. Seth, “The Alleged Fallacies in Mill’s “Utilitarianism””, *Philosophical Review* 17 (1908), 474-476, E. W. Hall, “The “Proof” of Utility in Bentham and Mill”, *Ethics* 60 (1949), D. D. Raphael, “Fallacies in and about Mill’ s *Utilitarianism*”, *Philosophy* 30 (1955), 346-349, N. Cooper, “Mill’s “Proof” of the Principle of Utility”, *Mind* 78 (1969), 278-279, 小泉仰『ミルの世界』(講談社学術文庫、1988 年)、166-172 頁、Crisp, *op. cit.*, pp. 70-77, H. R. West, *An Introduction to Mill’s Utilitarian Ethics* (Cambridge, 2004), pp. 124-128.

ミル擁護論の主流は、先に見たように、その発言は文字通りに理解されるべきではなく、その真意は別のところにあったと言うであろう。しかし、この発言は明らかに、「ある対象を望んでいるなら、その対象は望ましい」ということを述べているのである。それゆえ、もしミルの真意が主流の解釈する通りであったのなら、ミルはこのような誤解を招く発言をすべきではなかったのである。知性ある人々を説得するつもりなら、なおさらである。この発言は不注意な発言であったと言わざるをえないことになる。

ところが、これと同様の発言が、別の箇所にも現れているのである。ミルは次のように語っている（前者を引用文(b)、後者を引用文(c)としておく）。

> 「もし人間の本性が、幸福の一部でも幸福の手段でもないものを求めないようにできているならば、これらのものが唯一望ましいものであるということの証明として、ほかにどんな証明も得られないし、またどんな証明も必要ないのである。」(4.9)

> 「あるものを望むこととそれを楽しく思うことは、またあるものを嫌うこととそれを苦痛に思うことは、全く切り離せない現象であり、あるいはむしろ、同じ現象の二つの部分であり、厳密な言葉で言えば、同じ心理的事実の二つの異なった呼び方である。ある対象を（その結果のためではなく）望ましいと思うことと、それを楽しいと思うことは、まったく同じことである。」(4.10)

引用文(b)は、「人間は幸福だけを望む」という結論を引き出すための具体的な考察をした後に述べられた文章である。そしてこの文章から、本論第１章で挙げた証明（８）（幸福は、人間的行為の唯一の究極的目的であり、幸福の増進はあらゆる人間行動を判断する基準である。よって、幸福は道徳の基準でなければならない）が引き出されている。この文脈から、この文章では、引用文(a)とは若干異なり、「もし幸福だけが望まれるなら、幸福だけが望ましい」といった主張がなされている。問題の解釈にとってこの主張は、「あるものが望まれているなら、そのものは望ましい」といった主張とは異なり、妥当な主張であろう[9]。しかしそれは、「望ましくない幸福もあるが、望ましいのは幸福だけである」を前提してのみである[10]。もしこの主張が、「もし幸福だけが望まれるなら、（すべての）幸福だけが望ましい」ということを意味しているなら、その主張は問題の解釈にとって認めることができない主張となる。なぜなら、その時は、その主張は、「望まれる」から「望ましい」を推論していることになるからである。

引用文(c)では、「望むこと」と「楽しく思うこと」の一致と、「望ましいと思うこと」と「楽しく思うこと」の一致が並べて述べられている。この二つの一致が認められるということは、「望むこと」と「望ましいと思うこと」の一致も認められるということである。つまり、「ある

---

[9] Cf. R. F. Atkinson, “J. S. Mill’s “Proof” of the Principle of Utility”, *Philosophy* 32 (1957), 161-162.

[10] ただしその場合は、次で述べる本流的解釈への批判と同様の批判が、この引用文を含めた第９段落に関しても当てはまることになる。

対象が望まれているなら、その対象は望ましい」ということになる。これも、問題の解釈にとって認めることができない主張である。

以上のように、主流的解釈に従えば、ミルはたんに不注意であったというより、むしろあまりにも不注意すぎた、ということになる。しかし、そうすると、これほど不注意に語られた議論で知性ある人を説得しようと意図しているということ自体が理解しがたいことである。

次に、主流的解釈は、「功利性原理の証明」そのものを破壊してしまう。こうした解釈に従えば、引用文(a)では、「望まれているものなら、それは望ましいものである」と推論されているわけではない。しかし、「望ましいものなら、それは望まれているものである」といった推論が引用文(a)の主張として認められていると言える。この推論を認めるということは、「望まれているもの」がすべて「望ましいもの」ではないが、「望ましいもの」なら、それは「望まれているもの」であるということを認めることである。これは、「望まれているもの」の中のある部分が「望ましいもの」であるということを意味する。つまり、「望まれるもの」の中には「望ましくないもの」も存在するということである。

だが、そうすると、引用文(a)が提示されている第３段落の記述に不都合な点が生じてくる。第３段落では、本論第１章で述べた証明の命題（１）～（５）について論じられている。問題の解釈に従うと次のようになるであろう。（２）の命題（各人は、自分自身の幸福を望んでいる）は、少なくとも「自分の幸福」は「望まれているもの」の集合に入る、ということを意味する。そこで、「望まれているもの」の一部が「望ましいもの」であるのだから、（３）の命題（各人の幸福は、その人にとって善いもの(a good)である）は、「望まれているもの」である「自分の幸福」は、すべてではないが、その一部が自分にとって「望ましいもの（善いもの）」であるということを意味することになる。ここから、（４）の命題（全体の幸福は、すべての人の総体にとって善いものである）が出てくるわけだが、命題（４）も命題（３）と同様に解釈されるであろう。つまり、「全体の幸福」は、すべてではないが、その一部が「善いもの」である。「全体の幸福」の中にも「善くないもの」が存在することになる。だがミルはこの結論を受け入れることができないのではないか。なぜなら、ミルの「功利性原理」において「全体の幸福」はすべて「望ましいもの（善いもの）」であると考えられるからである[11]。

５　「望ましい」の二つの意味と「心理的利己主義」

以上、ミル批判、ミル擁護論、そしてミル擁護論の欠陥について述べてきた。ミルの「功利性原理の証明」の議論は曖昧なところが多く、ムーアに代表される強力な批判に晒されてきた。ミル擁護論はどうかといえば、ミル擁護に成功しているとはとても言えない。それではミル批判は的を射ているのだろうか。私はそう考えない。

そもそも我々は、「望ましい」、「善い（よい）」といった言葉をどのように使っているのだろ

[11] こうした結論を避けるために、 命題（３）から命題（４）への移行において何らかの操作が可能だろうか。可能だとは思われないが、この問題はここではこれ以上論じないでおく。また、主流的解釈以外にも、「望ましいものなら、それは望まれているものである」といった命題のみを認めるべきだとする主張には、これと同じ批判が当てはまるであろう。

うか。その使用に注目すると、こうした言葉の意味には、使用上の重要な区別があることが分かる。私が、例えば、「人が困っているとき、手助けをすることが望ましい（よい）」と語るとき、私は、「困った人を助けるのは社会全体にとって望ましい（よい）」といった意味でそう語っている。私は、社会全体の視点から「望ましい（よい）」という言葉を使っているのである。すなわちそれは、〈道徳的な意味〉での「望ましい（よい）」という言葉の使用である。これに対して、例えば、「最近太り気味なので、適度の運動をすることが望ましい（よい）」と私が語るとき、私は、「適度な運動をすることは、私にとって望ましい（よい）」といった意味でそう語っているのである。私は、個人の視点から「望ましい（よい）」という言葉を使っているわけである。それは、〈非道徳的な意味〉での「望ましい（よい）」という言葉の使用である。この意味での「望ましい」ものの中には、〈道徳的な意味〉で「望ましくない」ものもある。また逆に、〈道徳的な意味〉で「望ましい」ものの中には、〈非道徳的な意味〉で「望ましくない」ものもある。このように、「望ましい」、「善い（よい）」といった言葉には、〈道徳的な意味〉と〈非道徳的な意味〉の区別がある。我々が日常においてこうした言葉を二つの意味を区別しながら使って生活しているということは言語使用上の事実である。

こうした視点からミルの証明を見てみると、「望まれる」－「望ましい」の関係について述べられている問題の引用文(a)の数行後に、「各人は、自分自身の幸福を望んでいる」（証明の命題（２））と言われており、さらにその数行後に、「幸福は善である。すなわち、それぞれの人の幸福はその人にとって善であり、それゆえ、全体の幸福はすべての人の総体にとって善である」（証明の命題（３）（４））といった記述がある。特に、「それぞれの人の幸福はその人にとって善であり」という文章が注意をひく。つまり、この記述の前の部分では、各人の「欲求」、「望ましさ」、「幸福」が考察の対象であって、この記述において、個人の視点から社会全体の視点への移行が語られているのである。この個人が社会に生活する個々の具体的な個人であることは、この記述の後に命題（５）の主張がきて、段落が変わって、実際に人間が心理的に幸福のほかに何も望まないこと（証明の命題（６））が、「徳」、「金銭」等を具体例として、自己と他人についての観察を通して主張されている、という点に示されていると思われる。

要するに、引用文(a)では、個人のレベルでの「望まれる」－「望ましい」の関係について述べられているのである。ある人が「望むもの」は、その人にとって「望ましいもの」であり、その人が「望んでいるもの」以外に、その人にとって「望ましいもの」はありえない。つまり、個人それぞれにとっては、「ある対象が望まれているなら、それは常に望ましいものである」と言えるのである[12]。これは、引用文(b)(c)の記述についても当てはまる。この段階では、〈道徳的な意味〉での「望ましい」は問題となっていないのである。

それゆえ、本論第２章で挙げたミル批判は当てはまらない。「望まれる」－「望ましい」の論

[12] この問題に関連して平尾透氏は、認識論的仮説として、非社会的な「絶対的単独者」といったものを措定して、その「絶対的単独者」の視点から「望まれているものは、望ましいものである」という主張を救おうとしている（平尾、前掲書、175-179 頁を参照）。しかし、私のいう「個人」とは、本論で述べているように、「我々生身の人間個人個人」のことである。私は、社会に生活する人間一人一人に注目して、本論のような論述を展開しているのである。

点が個人のレベルにあるので、ミルが言うような類推は間違っていはいない。また、ミルは定義を企てているわけでもない。さらに、ミルの議論に対して、「事実判断」から「価値判断」の導出は禁止されると批判されるとき、ミルは、「個人的な事実に関する判断」から「道徳的な価値に関する判断」を導出していると考えられているのであろう。「自然的性質」と「非自然的性質」を区別すべきだというミル批判の場合も、「個人に関する性質」と「道徳的な性質」をミルは同一視していると考えられていると思う。しかし、今見たように、ミルの議論をそのように解釈すべきではない。その議論では、「道徳」はまだ考察の対象ではないのである。ミル批判者の根本的な誤りは、「望ましい」、「善い（よい）」といった言葉における〈道徳的な意味〉と〈非道徳的な意味〉の区別を明確に認識できなかったことにある。また、ミル擁護者も同様の過ちを犯しており、その擁護論が不整合に陥ったのは当然のことである[13]。

個人にとって、「望まれるものは、望ましいもの」であった。逆に言えば、ある人にとって「望ましいもの」とは、その人が「望んでいるもの」だけである。つまり、ある対象がある人の「望んでいるもの」であるなら、同時にその対象は、その人にとって「望ましいもの」であるということである。従って、個々人それぞれが「望んでいるもの」は、個々人それぞれにとって「善い（よい）もの」であり、「快いもの」であり、「利益あるもの」であり、「幸福」である。つまり、個々人の「利益」、「幸福」は、個々人が「望んでいるもの」のすべてに渡ると考えてよい。人間はそれぞれ自分の利益、幸福を望んでおり、各人の幸福は各人にとって善（よいもの）なのである（「心理的利己主義」）。

「功利性原理」を証明するにあたり、こうした「心理的利己主義」を認めていたということが、ミルにおいてまず注目すべき点である。もちろん、「心理的利己主義」から「功利主義」への移行が可能かどうかは別の問題である。

６　おわりに

以上、ミルの「功利性原理の証明」のうち、「望まれる」と「望ましい」に関する命題（１）をめぐる対立を、「心理的利己主義」という視点によって解消し、「心理的利己主義」の真理性に照明を当ててきた。これに関連して残された問題は、日常の言葉遣いにおいて「幸福」と区別されるものを人が望むことがあるという現象を説明することである。この問題を処理することによって、「心理的利己主義」の真理性がより鮮明になるだろう。また、「心理的利己主義」から「功利主義」への移行の問題もある。これらの問題についての考察も順を追って行っていく予定である。

（おおいしとしひろ　大阪大学非常勤講師）

［キーワード］
功利性原理の証明　　欲望　　非道徳的善　　幸福　　心理的利己主義

[13] ミル自身がこの二つの意味の違いを明確に意識していたかどうかは、一つの問題点である。ただここでは、明確に意識していたのなら、別の論述の仕方があっただろうということを指摘しておく。